

# もくねじ

海野十三

青空文庫



倉庫そうこ

ぼくほど不幸なものが、またと世の中にあるうか。

そんなことをいい出すと、ぜいたくなことをいうなど叱しかられそうである。しかし本当にぼくくらい不幸なものはないのである。

ぼくをちよいと見た者は、どこを押せばそんな嘆なげきの音ねが出るのかと怪あやしむだろう。身体はぴかぴか黄おう金色ごんいろに光つて、たいへんうつくしい。小さい子供なら、ぼくを金きんだと思うだろう。ぼくをよく知っている工場の人たちなら、それがたいへん質しのいい真

鑰んちゆうであることを一目でいいあてる。実際ぼくの身体はぴかぴか光つてうつくしいのである。

ぼくは、或る工場に誕生すると、同じような形の仲間たちと一緒に、一つの函はこの中に詰めこまれ、しばらく暗くらがりの生活をしなければならなかった。その間ぼくは、うとうとと睡ねむりつづけた。まだ出来たばかりで、身体の方々が痛い。それがなおるまで、ぼくは睡りつづけたのである。

それから数十日経たつて、ぼくは久しぶりに明るみへ出た。

そこは、倉庫の中であつた。でっぷり肥こえた中年の人間が——倉庫係のおじさんだ——ぼくたちのぎっしり詰つまっているボール函はこを手にとって、蓋ふたを明けたのだ。

「お前のいうのはこれだろう。ほら、ちやんとあるじゃないか」というと、別の若い男がぼくたちを覗きこんで、

「あれえ、本当だ。もう一函もないと思つていたがなあ。どこかまちがつて柵たなすみの隅へ突込んであつたんだねえ。きつと、そうだよ。つまり売れ残り品だ」

といいながら、指を函の中に突込んで、ぼくたちをかきまわした。ぼくはしばらく運動しなかつたので、彼の若い男の指でがらとかきまわされるのが、たいへんいい気持ちだった。

「売れ残り品じゃ、役に立たないのか」

中年の男が、腹を立てたような声を出した。

「いやいや、そんなことはない。掘り出しものだよ。ありがたい

ありがたい。これで今度の分は間に合うからねえ。なにしろこのごろは納期がやかましいから、もくねじ一函が足りなくても大丈夫なんだ」

若い男は、うれしそうに目を輝かして、ボール函の蓋をしめた。ぼくたちの部屋は再び暗くなった。

「それみる。やつぱりありがたいだろうが。お前からよくもくねじさんにお礼をいつときな。売れ残りだなどというんじゃねえぞ」  
函の外には、倉庫係のおじさんが機嫌をとり直して、ほがらかな声を出す。

「じゃ貰っていくよ。伝票はさつきそこに置いたよ」

「あいよ。ここにある」

それからぼくたちは、若い男の手に驚<sup>わしづか</sup>掴みにされ、そしてどこともなく連れていかれた。

今から思えば、まだこのときのぼくは希望に燃えて気持は至<sup>しごく</sup>極<sup>ごく</sup>明<sup>めい</sup>るかつた。仲間同士、これからどんなところへ行って、どんな機械の部分品となつて働くのであろうかなどと、われわれの洋々たる前途について、さかんに談<sup>だん</sup>合<sup>あ</sup>つたものである。

宿<sup>しゆくめい</sup>命

函はこの外からは、そのときどきに、いろいろな音響が入ってくる。また人間たちの話声がきこえる。それをじつと聞き分けるのは、たいへん興味のあることだった。

ぼくたちの函が、どすんと台の上か何かに載せられたのを感じた。そこはたいへん沢山の大きな機械が廻っている部屋であつた。「はい、もくねじを貰つてきましたよ。これが最後の一函です」さつき聞き覚えた例の若い男の声だ。

「おい待つてくれ。ちよつと中身を調べるから」別の太い声でした。

「大丈夫ですよ。倉庫で受取つたときちゃんと調べてきましたから」

「待て待て。お前はこのごろふわふわしていて、よく間違いをやらかすから、あてにならないよ。それに間違つていれば、すぐ取替とりかえて来てもらわないと、折角せつかくここまで急いだ仕事おが、また後おくれるよ。急がば廻れ。念には念を入れということがある」

「ちえつ。十分念を入れてきたのになあ」

「まあそう怒るな。どれ、そこへ明あけてみよう」

太い声の男が、ぼくたちを明るみへ出してくれた。ぼくたちは、ざらざらつと、冷い冷い鋼板こうばんの上にぶちまけられた。しばらくくらやみ暗闇くらやみにいたので、眩まぶしくてたまらない。大きな手でぼくたちをなで廻す。

「ほう。これは優級品だ。まだこの手のがあつたのか。おい、こ

れでいいよ。ありがとう」

ぼくたちは、ここでもまた褒められた。褒めてくれたのは、仕上げの熟練工じゅくれんこうの木田さんきだという産業戦士だった。

「それごらんさい。私はこのごろふわふわなんかしていませんよ。木田さん、この次そんなことをいうと、私はあんたに銃じゅうけ術じゆつの試合を申込みますよ」若い男は得意だ。

「あははは。銃剣術でお前が張切っている話は聞いたぞ。いつでも相手になってやるが、油を売るのはそのへんにして、早く向うへいけ」

「ちえつ。木田さんはあんまり勝手だよ。油なんか一滴も売ってはいませんよ、だ」

若い男は、口笛を吹きながら、向うへいつてしまった。

それから木田さんは、また暫くしばらぼくたちを更にほればれと撫なで廻まわしていたが、やがてぼくたちを両手ですくいあげると、別の大きな機械台の上へ連れていった。その傍そばには、ぴかぴか光った大きな無電装置のパネルがたくさん並んでいた。これは国際放送用の機械であるらしい。

木田さんは、そこにいた仲間ともに声をかけた。

「おい、もくねじが来たぞ。早いところ、残りの穴へ埋うめこんでくれ」

木田さん自身も、ぼくたちを手に掴つかんでポケットに入れた。それから右手にドライバーを握り、ポケットからぼくたちを一つ摘つま

みあげては、パネルの後側にあるターミナルの並んだアルミの小さい枠わくを、装置のフレームに取付けるため、両方の穴と穴とを合わせ、その中にぼくたちを植え込み、それからドライバーでくるつくるつとねじこんだ。

ぼくたちの仲間は、どんどんポケットから出ていった。ポケットの中が空からになると、また木田さんはぼくたちを一掴ひとつかみポケットの中に入れた。その中にはぼくも交まじっていた。

ぼくは、番の来るのを今か今かと待っていた。

そのうちに太い温い指が、ぼくの胴どうなか中をぎゅつと摘つまんだ。いよいよ番が来たのだ。ぼくは胸を躍らせた。国際放送機の部分品として、これからぼくは永久の配置につくのだ。その機械は、や

がて送信所に据えつけられ、全世界へ向つて電波を出し始めるであらう。大東亜戦争を闘っている雄々しい日本の叫びが、世界中に撒き散らされるのだ。ああ国際宣伝戦の大花形！ 木田さんは左手で、既にアルミの小さい枠の装置のフレームの穴とぴつたり合わせていた。右手の指に摘みあげられたぼくが、その穴に今や挿しこまれようとした瞬間、

「おやア」と、木田さんの異様な声が出た。

「何だい、このもくねじは……。これは出来損いじゃないか。」

なぜこんなものが入っていたんだらう。誰かぼやぼやしてやがる。そういつて木田さんは、ぼくを機械台の上に立てた。ぼくはどきんとした。

「何を怒っているんだい、木田さん」

横よこあい合あから、疝かんだか高たかい声が聞えた。

「いや、優級品のもくねじだから安心していたんだ。ところがこんな出来損いのが交つていやがる。見掛けは綺麗なんだけれど、螺旋らせんの切込み方が滅茶苦茶めちやくちやだ。どうしてこんなものが出来たのかなあ」

「どれどれ」

と、疝かんだか高たかい声の男が、ぼくを指先につまみあげて、眼のそばへ持つていった。熱い息が、下からぼくを吹きあげる。

「なるほど、これはふしぎなもくねじだね。たしかに出来損いだ。それにしても、よくまあこんなものが出来たもんだ。これはあれ

だよ。旋盤せんばんの中心が何かの拍子に狂ったのだ。だからこつちとこつちとが、よけいに深く削けずられている。これじゃねじ山は合っ  
ていても細いから、挿さし込こんでもやがてぬけてしまうよ。おお、  
それに頭がこんなに缺かけているじゃないか。ドライバーをあてが  
って、力をいれてねじ込もうとすれば、ドライバーがねじの頭か  
ら滑すべってしまふ。ひどいものを交ませて寄越よこしたなあ。とにかくこ  
れはだめだ」

そういつて、彼はぼくを元のとおり、機械台の上に、頭を下に  
して立てた。

ぼくの不幸なる身の上は、この刹せつ那なにはつきりしたのである。  
螺旋らせんがよけいに深く切り込んである。それに頭の一部が缺けて

いる。ああぼくは何という不幸な身体に生まれついたことであるか。

目の前が急に暗くなった。ぼくは台の上で身体をふるわせ、歎き悲しんだ。折角せっかくりっぱな国際放送機の部分品となって、大東亜戦争完遂かんすいに蔭ながら一役を勤めることが出来ると思ったのに。若しもぼくに、羽根があつたら、この台の上からひらりと飛び出して、あの穴へとびこむのだが……。

ことうん  
幸運

すっかり希望を失ったぼくは、機械台の上についてまでも震えながら、<sup>なげ</sup>歎き悲しんでいた。

そのうちに、ぼくはとつぜんむずと摘みあげられた。<sup>つま</sup>ぼくは愕<sup>おどろ</sup>いた。はつとして目を睜<sup>みは</sup>ると、知らない若い男の指に摘みあげられていた。

その若い男は、もう一人の男と、しきりにあまりよくないところの話に夢中になっていた。

「よせよ、大きなこえを出さない。木田さんに聞かれたら、怒られるよ」

「大丈夫だい。木田さんは呼ばれて主任のところへ行っちゃった。

おい、どうする。行くか、行かないか」

「おれはいやだよ」

「ぼか。いくじなし」

そういいながら、その若い男は、ぼくを穴の中へ挿し込んだ。

私はこの意外な出来事に、夢かとおぼかり愕おどろき、そして胸を躍らせた。

木田さんが向うへいった留守に、何にも知らないこの若い男が、ぼくをよく調べもしないで、装置の穴の中に挿し込んでしまったのである。やがてぼくの頭に、ドライバーが当てられた、ぐつとお圧されて、きりきりと右へ廻された。ドライバーは、何なんべん遍かつるりと滑すべった。そのたびにやり直した。

だがその若い男は、話に夢中になっていたので、文句も云わず

何遍でもやり直して、とうとうぼくを穴の中に押し込んでしまったのである。

ぼくは暫くしばらく呆然ぼうぜんとなっていた。

喜んでいいのか、それとも悲しんでいいのか。

自分のあさましい身の上が分ると、ぼくはもう初めに考えていたように、大きなりっぱな機械いに抱いだかれることをすっかり断念しなければならなかった。今の今まで、断念していたのである。

ところが思いがけなく、ぼくは憧れあこがの国際放送機の中に取付けられてしまったのである。こんなうれしいことが又とあろうか。

ぼくを、こうした思いがけないすばらしい幸運へなげこんでくれたこの若い男に対し、どんなに感謝しても感謝し足りないと思

った。

だが、ぼくの心の隅に、何だかおりのようなものが溜たまっていることについて、ぼくはいささか気にしないわけにいかなかった。というのは、ぼくは公然こうぜん堂々どうどうと大手をふつてこの大役にとびこんだわけではなかつたのである。

早くいえば、その若い男が、くだらない話に夢中になっているお蔭で、こんなことになつたのである。それは決して公明正大であるとはいえない。身は一つのもくねじであるが、日本に生まれただ以上、やっぱり日本精神を持っている。だからぼくの折角せっかくのこの幸運も、自ら省かえりみて、いささか暗い蔭のさしていることが否いなめない。

それでもいいのであろうか。

声をたてるわけにもいかないの、ぼくはだまってそのまま成なりゆき行にまかせるより外ほかなかつた。不幸なる幸福！ 少々うしろめたい幸運！

果してぼくは、いつまでも幸福でいられるのであろうか。

悲劇ひげき

その後ぼくは異状がなかった。

ぼくの取付けられた放送機は、それからのち方々へ廻った。

多くの時間が、この装置の試験に費された。装置には、真空管も取付けられ、すっかりりっぱになったところで、はじめて

電気が通され、計器の針が動いた。

試験をしていると、装置はだんだん熱してきた。ぼくはあまり暑くて、しまいには汗をかいた。

そのうちに試験も終り、荷作りされた。

ぼくはトラツクに揺られ、それから貨車の中に揺られ、放送所のある遠方の土地まで搬ばれていった。

そこから先、またトラツクにのせられ、寒い田舎を搬んでいかれた。

そして遂に放送所についた。

ぼくの取付けられている機械は、函から出された。そこには多勢の技師が待っていた。

「ああよかった。これで安心だ。間に合うかどうかと思って、ずいぶん心配したなあ」

その中の一等年齢をとった人が、そういつて一同の顔を見廻した。

それからぼくの機械は、多勢の肩に担がれ、二階の機械室まで持っていかれた。

この機械を据えつける基礎はもうちゃんと出来ていた。機械はその上に載せられた。うまくボルトの中に嵌らないらしく、盛ん

にハンマーの音がかんかん鳴った。

その震動は、ぼくのところまでもきびしく響いてきた。

「おや、これはいけないぞ！」

ぼくは気がついた。たいへんなことが起りかけた。ぼくの身体が、穴から抜けそうである。

あんまりがながんやるからいけないのである。基礎がちやんとうまく出来ていればよいのに、それが寸すんぽう法ほうどおりいつていないものだから、ハンマーをがながんふるわなければならぬのだ。それは全くよけいな心配をぼくにかける。いや今となつては、単なる心配ではない。ハンマーがガンと鳴るたびに、ぼくの身体は穴からそろそろと抜けていくのであった。

「おい、ねじが抜けるよ。誰か来て留めてくれ」

ぼくは人間に聞えない声で、一生けんめいに怒鳴った。

仲間のもくねじたちは、きつとぼくの悲鳴を聞きつけたにちがいない。しかし、彼等の力ではどうすることも出来ないのだ。

ガーン、ガーン、ガーン。

呀あつという間に、ぼくは穴からすつぽりと抜けてしまった。そして小さい声をたてて、コンクリートの床に転ころがった。頭の角かどをいやというほどぶつつけた。ああ万事休す！

ぼくは、又もや大きな悲しみの淵ふちに沈んだ。床から機械の元の穴まですいぶんはるかのう上だ、翼つばさない身は、下からとびあがっていくことも出来ない。

悲しみの中にも、ぼくはまだ少しばかりの希望を抱<sup>いだ</sup>いていた。

それは誰かがぼくの傍<sup>そば</sup>を通りかかつて、ぼくが転がっていることに気がつくのだ。おや、こんなところにねじが落ちている。一体どこのねじが抜けたんだろうと行って、その人が親切に、ぼくの入るべき元の穴を探してくれば、ぼくはたいへん幸福になれるのであった。どうか、誰か技師さん、ぼくを見つけてくれませんか。

しかし実際は、ぼくを見付けてくれる人間は一人もいなかったのである。運のわるいときには悪いことが重<sup>かさ</sup>なるもので、それから三十分ばかり経った後のこと、技師の一人がこつこつと靴音を響かせて、ぼくの転っている方へ歩いて来たが、その靴先がぼく

の身体に当つて、ぼくはぼーんと蹴とばされてしまった。

なにしろ軽い身体のことであるから、たちまち床をごろごろと転つた末、部屋の隅にあつた木箱の壊れがこわつみあげてあるその下へもぐり込んでしまった。ああ、もう観念の外はない。再びあおりっぱな機械の穴へは戻れないことになってしまった。

流るてん転

それから先の話は、あまりしたくない。

ぼくは二十日、壊れた木箱の下にいた。

やがて工事場の取片づけが始まって、木箱は部屋から外へ搬ばれていった。そのあとに、ぼくは、コンクリートの魂かたまりや縄なわ片きれなどと一緒に残っていた。ぼくの身体はもう埃ほこりにまみれて、かつて倉庫番から褒めほちぎられたときのような金色きんいろの光沢こうたくは、もう見ようとしたって見られなかった。全身ぜんしんは艶つやをうしない、変に黄色くなっていた。

埃と一緒に、ぼくは掃き出された。そして放送所の後庭あとにわに掘ってあるごみ捨て場の方へ持つていかれた。いろんなきたないものと一緒に、じめじめした穴の中に、ぼくは悲惨ひさんな日を送るようになった。身体はだんだんと錆さびて来た。青い緑ろくしやう 青がふきだし

た。ぼくは自分の身体を見るのがもういやになった。

思えば、ぼくほど不幸な者はない。こんな不幸に生れついた者が、またとこの世にあるだろうか。ぼくを生んだ人間が恨めしいもつと気をつけて旋盤せんばんを使ってくればよかつたんだ。

しかしぼくも途中でちよつぴり幸福を味わつたことがあつた。それはあの若い職工さんが、くだらない話に夢中になつて、僕を放送機の孔あなに取付けてくれたからだ。あれから、この放送所へ来て、試験が行われている間までは、ぼくはたしかに幸福であつたといえる。

だが、今から考えてみると、それは間違つた幸福だつた。元々あの若い職工さんが、誤あやまつてぼくを放送機にとりつけたのであつ

た。だからぼくは当然今のようなみじめな境<sup>きようかい</sup>界<sup>かい</sup>に顛<sup>てん</sup>落<sup>らく</sup>すること、始めから分り切っていたのである。間違つた幸福をよるこんでいたぼくは、何というばかだつたらうか。

或る日、このごみ捨て場に、舎<sup>しやたく</sup>宅<sup>たく</sup>の子供たちが三四人で遊びに来た。汚いところだが、子供たちには、たいへん興味のある遊び場であるらしい。子供たちは、みんな女の子であった。ごみの山の上を、上<sup>あが</sup>つたり下<sup>お</sup>りたりして遊んでいるうちに、一人の鼻たらしの七つ位の子供が、ふとぼくを見つけて、小さな掌<sup>てのひら</sup>の上へ拾い上げた。

「いいものがあつたわ。これは、きたないけれど、ねじ釘<sup>くぎ</sup>でしょう。お家へ持ってかえって、お母さんあげるわ。額<sup>がく</sup>をかけるの

に釘が欲しいってお母さんいつていたのよ」

ぼくは、その子供の小さい手に握られていた。そして身体がぽかぽかと温くなった。

「どれ、見せてごらん」

別の子供がやって来た。ぼくの主人は、小さな掌をひらいた。すると相手が大きな声を出した。

「まあ、きたないねじ釘ね。その青いものは毒なのよ。そんなものを持っていてると手が腐くさるから捨てちやいなさい」

「まあ……」

ぼくは、ぽいと捨てられてしまった。そこは所内の通路の上で、雨ふりの日のために、舗装道路ほそうどうろになっていた。ぼくは赤面せきめんした。

もう何も考えまい。

ぼくは目をつぶって死んだようになっていた。が、最後にりつぱな人に拾い上げられた。それはこの放送所の所長さんであった。どうしてこの小さいぼくが見付かったんであろうか。所長さんは日向ひなたに立ち留とどまって、ぼくを摘つまみあげ、つくづくと見ていた。

「やれやれ可哀想に、このもくねじは……。生まれながらの出できそ来こ損ないじゃな。ここへ捨てられるまでは、さぞ悲しい目に会つ

たことじやろう。おい、もくねじさん。お前はこのままじゃ、どうにもうだつが上らないよ。だからもう一度生れ変わってくることだね。真しんちゆう鍬くわの屑くず金かねとして、もう一度製鍊所せいれんじよへ帰かえって坩堝るつぽの中でお仲間と一緒に身体を熔とかすのだよ。そしてこの次は、り

っぱなもくねじになって生れておいで」

所長さんのやさしい言葉に、ぼくは胸がつまって、泣けて泣けて仕方しかたがなかった。さすがに技術で苦勞した所長さんだ。ぼくのような出来損いのもくねじの人生を考えてくださる、この情け深い所長さんの言葉によつて、ぼくはこれまでの身を切られるようになつらいことを、一いっぺん遍に忘れてしまった。ああよかつた。やがて所長さんは建物の中に入つて、ぼくを木箱きばこの中にぽとんと入れた。その箱には「屑くず金がね入れ」と札がかかっていた。



# 青空文庫情報

底本：底本：「海野十三全集 第10巻 宇宙戦隊」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

初出：「譚海」

1943（昭和18）年1月

入力：tatsuki

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# もくねじ

海野十三

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>